

多民族国家に住んで考えたこと —シンガポールで見た二言語併用政策とアイデンティティ—

小林 敦子

日本で体験した日本語ショック

マレーシアで、国語問題の葛藤の様子を垣間見、そして日本人とは、日本語とは何かというテーマを突き付けられて日本へ戻ってきた私は、帰国後、思わぬ日本社会への再適応ショックを受けてしまった。異文化社会で、いわゆる文化ショックを受けることは一般によく知られている。が、異文化社会に一応適応した後、元の所へ帰るとなると、外国で知らないうちに、その国の文化や物の考え方など身につけて、帰国となる。元の所は、不在の間、やはり何らかの変化をしているわけだから、元の社会に入る時に、再適応ショックが起こる。海外での文化ショックと比べて、戻ってからの再適応ショックというものは、日本ほどではないが、どこの国でもあまり関心がなく、海外での生活体験者は、帰国後一定期間、人知れず悩むことが多いようだ。

私の場合、マレーシアでは、マラヤ大学の語学センターという小さな世界の中で、日本語教師として接することができた人々に、私を、日本をどのように説明したら理解してもらえるか苦心をしたつもりである。日本に帰ってきたからには、日本語が全国一律に通じる日本語の世界だから、言葉の心配はもうないと安心したのも束の間のこと。私はその日本で日本語そのものに大きなショックを受けてしまった。例えばマレーシアの体験を踏まえた私の考えを、日本語で日本人に話しても、アジアに関心のない人や、多民族国家の人々の生活を知らない人には通じない。日本語は、同一文化、社会組織力の内輪で話すのには実に適した言葉のようだ。マレーシアなどのことを話す時には、日本語でどう説明したら、日本人にわかってもらえるのだろうか。私は、マレーシアで、マレーシアの人々に日本のことを理解してもらえるよう工夫し努力した。その同じことが、日本でもやはり大事なのだということを思いしらされた。混雑する駅で、階段をすさまじい勢いで走って登り降りする群衆の波に圧倒され、どぎつい表現の広告やテレビ番組などに驚かされたこともあり、私は1か月ほど日本語で話すのが恐ろしくてしかたがなかった。

日本での自己証明は、個人の名前ではなく所属機関の名前だから、帰国直後で所属機関のない者には社会の信用がない。私は一定期間、マレーシアでの体験を整理し、昇華させたいという欲求もあり、社会での所属機関を一時的にも得たいということもあり、大学院という避難所に飛び込んだ。ここでは、私の意図に反して、私の体験を研究として昇華させるに至らなかったのだが、日本研究のために留学した海外からの友人達との交流で、日本語で異文化の人々と、日本やその他の国々を語り合い勉強し合うという喜びを経験した。大学院での二年の社会復帰への猶与期間が終わる頃、あの懐しいマレーシアの隣国シンガポールでの日本語教育の話があり、私は日本語ショックの恐怖をも忘れ、仕事の内容もよく調べずに引き受けてしまった。

日本とシンガポールの二国間政府プロジェクトとしてシンガポールに職業訓練センターを開設す

小林敦子／多民族国家に住んで考えたこと

ることになり、日本から職業訓練計画作成と現地スタッフ養成を目的とした日本人専門家チームを派遣することになったのだ。日本の海外職業訓練協力の場では、それまで日本語教育は行われたことはない。シンガポールでの日系企業の増加に伴い、現地採用のシンガポール人労働者が増加するため、言語による障害をとり除き、より良いコミュニケーションを図るべく、シンガポール政府が特に日本語コース開設を強く要求したため、今回はじめて日本語コース必修の職業訓練センターが海外で開設することになったという。シンガポール政府は、日本語の授業を通して、愛社精神に富み、勤勉で労働意欲に満ちた日本の良き労働倫理も教えてほしいという熱い期待があったようだ。私は、日本の専門家チーム14名の末席につらなる唯一の女性として日本シンガポール訓練センターのプロジェクトに参加することになった。

バイリンガル シンガポールの二言語併用政策

シンガポールは人口240万弱、日本の淡路島ぐらいの大きさの都市国家である。マレー系市民を中心に、国内的にいろいろな摩擦を起こしながらも、マレー語国語化政策を推進しているマレーシアから、かつて分離独立したシンガポールは、中国系75.7%、マレー系15.3%、インド系7.7%、その他1.3%という人種比率である。しかし多数派である中国系市民の言語を国語とせず、少数派のマレー系の言語を国語とし、各構成民族を代表する中国語、マレー語、タミール語と、植民地時代の遺産であり、且つ、各民族間の共通語として英語を公用語としている。国の大きさも、生き方も、同じ様な人種構成により成り立っている多民族国家でありながら、対照的なマレーシアとシンガポール。シンガポールで、私はまたもや多民族国家に生きる人々のアイデンティティが、言語といかに深く関わっているかを痛感させられた。

毎日の新聞には、言語についての何かしらの話題やニュースのない日はない位、この国の人々の大きな関心を集めている。テレビやラジオのニュースは、時間帯を少しずつずらしながら、四つの公用語で流される（マレーシアも同様）。テレビ番組ばかりでなく、世界各国の様々な言語による映画は、英語物には、中国語とマレー語の字幕が、中国物やインド物には、英語とマレー語、インドネシア語の映画には、英語と中国語など、各々二言語の字幕が、画面の下に二列に出てくるものも面白い。

シンガポール人の子弟は、各々の公用語による初等教育を受ける権利があり、小・中学校は、主に使用される教育用語によって、英語系、中国語系、マレー語系、タミール語系の四つのタイプの学校に分かれている。

1965年、シンガポールがマレーシアから分離独立以来、民族融和、教育機会均等を旗じるしに、二言語政策を重視し、英語の重要性が強調された。二言語政策というのは、例えば、英語の学校の場合、生徒は英語を第一言語とし、自分の属する民族を代表している言語を第二言語として選択しなければならない。非英語系の学校では、各々の言語を第一言語とし、英語を第二言語とする。各民族の言語と英語という二つの言語による教育、つまり二言語併用教育政策である。二言語政策を推進した結果、シンガポールの小学校385校のうち、90%の小学校が英語を第一言語として教える英語系の学校になり、非英語系の学校は、今ではもう残りわずか10%を占める中国語系の学校だけとなっている。つまり、将来のシンガポール人は、中国系市民の中の一部を除いては、すべて英語を第一言語としつつ、各々の民族を代表する言語を習得することになるわけだ。

英語以外の他の三つの公用語は、シンガポールの主要民族を代表する言語として大まかに制定されたものである。しかし、各民族の言語背景は複雑である。例えば、中国系社会の場合、同じ漢字を使用している、発音の全く違う12の方言を母語とする人々から構成され、インド系はタミール語を中心にマラヤラム、テルグ、パンジャビ、ヒンディ、ベンガル語などを母語とする人々からなり、マレー系の市民は、ジャワニーズ、ブギス、ボヤニーズからなっている。

中国人社会で最も多く使用されている方言は、福建語42.2%、潮州語22.3%、広東語17%と続き、公用語である標準中国語（北京官話）人口の方は、わずかに3%弱にすぎないという。大体、二言語習得自体、大変なことなのに、シンガポールでは、公用語の一つであるマンダリンは、学校を出れば家庭や職場、地域社会では何の実用価値もなくなってしまふ。そして実際に社会で使われないマンダリンは、忘れられていき、中国系市民は英語と各自の母語である方言で生活することになる。

同じ中国系市民の間でも、方言の違いで意志が通じないときは、英語かマレー語が使われる。英語と各自の方言を併用し続けると、そのうち、いつか英語は各民族間の共通語だけにとどまらず、中国系市民間の共通語にさえなってしまうのではないか。そうなったら中国民族としての共通のルーツ、伝統文化といった遺産をも失うことになるのではないか。現に、近年英語が重視されてきたため、英語の言語環境の中だけで育ってきた若い世代が多くなってきた。漢字を知らない彼らは、中国的感覚の環境で育ち、中国語で教育を受けた人々とは、感覚、思考、行動など多くの面で異なっている。

そういった危機感から出てきたのが、「今後中国系市民は方言の使用を減らし 伝統文化の保持と統合の共通語としてマンダリンを使っていこう。」と、リー・クアンユー首相の演説により始まったマンダリン使用推進キャンペーンである。シンガポールに来て1か月目。私は、屋台の食物屋の店先のラジオで、感じのいいのびやかなリー首相のその演説を聞いた（1979年9月）。

マンダリン・キャンペーン

「マンダリンをマスターすれば、世界中の中国語を話す人々と交流できる。20年後には、四つの近代化を終えた中国が貿易の主要なパートナーとなり、マンダリンは世界の重要な言語となろう。世界の重要な言語、英語と中国語をマスターした中国系市民の未来は明るい。」と、マンダリン・キャンペーンは夢を語る。が、言語学習にとって、方言のみ使われるシンガポールの言語環境が大きな壁となっていた。キャンペーン開始の演説で、リー首相は、子供達の学習の負担を軽くするため、家庭内でもマンダリンを使用してほしいと述べ、中国系市民の父母達に、「英語とマンダリンか英語と方言か。」の選択を強くせまったのである。

首相の演説以後、新聞の反響はすさまじく、街のあちこちにマンダリン・キャンペーンのポスターや垂幕が張られ、またラジオやテレビのマンダリン学習番組、学校、職場、地域社会でのマンダリン学習コースが盛んになり、マンダリンのテープも飛ぶように売れていた。外国人の目には華やかなキャンペーンと共にマンダリン学習は着実に推進されているように見えた。

だが、問題は、そう簡単にはいかない。各民族の言語の選択は方言かマンダリンかを単純に問うてすむものではない。多民族国家シンガポールは、異民族間同士の結婚も多い。例えば、初期の中国系移住民は、移住先のマレー人との結婚が多く行われ、その結果名前は中国風で、母語はマレー

小林敦子／多民族国家に住んで考えたこと

語である独得の文化を造り上げたババ・ノニャといわれる人々がいる。

彼らは、中国系市民と分類されているが、母語はマレー語なのである。戸籍名は父子制をとるので、民族分類と母語が一致しにくいようだ。日本よりも厳しい進学競争に勝ちぬきエリートになるためには、ここでは、語学の成績が重要な切り札である。同一民族間同士の結婚による両親の場合はまだしも異民族間同士のカップルも多いので、言語選択の問題は深刻である。

ある日の英字新聞には、異民族間同士のカップルの子供の言語選択例が出ていた。福建語を母語とする中国系の女性と、マラヤラム語を母語とするインド系の男性のカップルである。まず両者の共通語、英語を子供の第一言語とするところまでは問題がない。問題は第二言語である。英語だけで教育された母親は、漢字ができず、また父親の母語は、インド系市民の共通語とされるタミール語とちがう。結局、彼らは、英語以外の両者の共通語であるマレー語を第二言語として選択したという。同じ状態にある他のカップルの場合は、子供の将来を考えて、国の多数派を占める中国系に準じて、あえてマンダリンを第二言語として選択し、夫婦共々、マンダリンを一から学びはじめたという。

国民の75%もの人口比を占める中国系市民を対象に行われた大々的なキャンペーンに対して、非中国系市民の受け止め方は複雑である。将来は、国語としてマンダリンを強制されるのではないかという危惧を与えるものらしく、政府も時々、マンダリン・キャンペーンは中国系市民を対象としたものと明言していた。

タミール語センター

マンダリン・キャンペーンに対して、すぐに反応したのはインド系市民である。中国系市民と同様に、インド系の社会も言語が複雑である。中国語では漢字が読めれば、文字による交流ができる。が、インドの諸言語は各々の文字も音声も違うので、お互いの言語を知らないと話ができない。インド系市民の63%を占めるタミール出身者のタミール語が、公用語となったのだが、特に発音のむずかしいタミール語よりも、東南アジア地域で使用範囲の広いマレー語を第二言語として選択したいという人達が多かった。が、マンダリン・キャンペーンを機に、インド系市民もインド文化遺産を受けついできたシンガポール人としての自覚を持ち、お互いの共通語としてのタミール語をもっと勉強し使っていこうという気運がでてきたようで、タミール語の新聞はすぐさまマンダリンならぬタミール語使用推進キャンペーンをはったのが印象的だった。

初等教育の機会均等、二言語政策を押し進めているシンガポールの教育の場を一度見たいと思ったのだが、見学・調査など意外にむずかしい。が、幸い文化情報局の役人の口添えを得てタミール語センターを見学することができた。

インド系の子弟は、当時すでにほぼ全員、英語系の小中学校に入り、第二言語として55%の生徒がタミール語をとっていた。シンガポール内の英語メディアムの学校のうち101校でタミール語を第二言語として習得できるのだそうだが、それ以外の学校の生徒で、タミール語を習得したい学生は、週に二回、四時間、タミール語センターなどに通って勉強をするのだそうで、私の見学したセンターは、7人の教師が54校から送られて来る626名の小・中学生、高校生達にタミール語を教えていた。

見学した時、丁度、討論会をしていた。明るく活発な討論の様子は、言葉がわからなくても興味

深かった。ただ学生達がスピーチをするたびに発する「ナンドゥリ！」という言葉が気になった。本場のインドのタミール語地域では、ナンドゥリは、大きな恩義を受けた時に使うとても重い意味の言葉で、軽い感謝の意を表わす時には、英語の「サンキュー」を使うのだから、討論の合間に、乱用されるととても気になる。シンガポール生まれの彼等の世代では、タミール語の語感や使い方が大きく変化しているのが、私にもわかる唯一の言葉ナンドゥリに象徴されているようだ。

授業中の生徒達は、元気にあふれ実楽しそうだった。バスを乗りついで遠方から来る者も多いのだが。校長先生に、英語とタミール語という二言語政策は生徒達に負担ではないかと尋ねてみたところ、インド系にとって英語をマスターするのは簡単だから、二言語政策は問題ない。またタミール系以外の市民は、一般に英語とマレー語、そして自分の母語となるわけで、これも問題がないとはっきり言い切るのだ。

タミール語センターでは、最後にインドから取り寄せたテキストや読物が保管されている図書室を見た。本棚には製本された本がずらりと並んでいるのだが、本の背表紙には図書分類のラベルが二つずつ貼りつけてあるので不思議に思っ手にとってみると、紙質の悪いインドの本を二冊ずつまとめて補強し製本したものだ。タミール語の本は、インドからの寄附かと質問すると、センターの所長は、大きく首を振って「とんでもない。政府の厳しいチェックをパスした注文書を送って、本はインドから取りよせているんですよ。」と憤慨口調。二言語政策で多民族国家を形成しながら、且つ、各民族の祖国との癒着、また干渉を警戒し、シンガポール人としての自覚を持たせたいというシンガポールの姿勢をはからずも見たような気がした。

シンガポールのアイデンティティ

シンガポールは、中国と正式な国交回復をしていないが経済的な関係が深い。私のシンガポール滞在中、首相の北京訪問があり、帰国した時のリー首相の演説。「中国は古い国。我々は新しい国。我々は中国からだけでなく、他の世界の国々から来た人々の国、シンガポールである。私達は中国人でない。シンガポール人だ。」とシンガポール人宣言をした。その後、ヴェトナム問題に関してインドに派遣した外交ミッションは、ダナバラ外相を中心としたインド系外交官達の構成であった。

多民族による新興国家の国造りのパターンはいろいろある。シンガポールの場合、各民族の言語と、異民族間の共通語となるべき英語との二言語併用政策をとり、各民族のルーツを大切にしながら、民族を越えて、シンガポールという新しい国を造り上げていくという意識の中に国のアイデンティティを見出して生きていこうというのであろう。

かつては華僑印僑などと云われ、世界中に一族のネットワークを広げ、一旦事あらば、国や土地、社会をも捨て去っていくと非難されることの多かった中国系、インド系の市民達。が、最近では、政府の国造り政策とも相まって、出かせぎでなく、シンガポールという国に定着して、多くの異なる文化の人々と一つの国を造りあげ発展させていこうというシンガポール人としての自覚が国民の間に高まってきているようだ。

これは、南インド風業食料理のレストランで、私が見た光景である。北インドから来たらしい旅行者が、何かと注文をつけ給仕を困らせていた。丁度、そこに居合わせた二人のインド系市民。給仕にいろいろアドバイスをして、北インドの紳士の意にそうようにした。カルカッタから来たとい

小林敦子／多民族国家に住んで考えたこと

うその紳士が、親切な二人に「君たちはタミール人かね。」と聞いた時、お互いに顔を見合わせた二人は、にっこりと笑い、「私達はシンガポール人なんですよ。」と言ったのだ。

もし私がシンガポール人だったとしたら、それも、公用語にない言語を母語とするシンガポール人だったとしたら、小さい時から、母語、英語、公用語と最低、三つの言語を学習し消化していかなければならない。小学生の時からそんなに幾つもの言語を学習するなんて、とても大変で、私は、とてもシンガポール人にはなれないと思う。それなのにここの人達は、日本語も、フランス語も……語も習いたいというのである。

日本シンガポール訓練センターに赴任した私は、外国語である日本語よりもまずシンガポール人として英語か、その他の公用語を、しっかりと勉強した方がいいと思われる訓練生達に出会い、彼らのための、日本語教育をしなければならなかった。そんな矛盾に悩んでいた私は、シンガポール大学の語学センターのタン氏に、ある日事もなげに言われた。「シンガポール人にとって言語は文化の問題ではなく生存の問題なのです。」と。シンガポールを思うたびに、その言葉はいつも私の耳に響いてくる。

付記 執筆者の小林敦子先生について

小林敦子先生は2011年11月8日に逝去されました。

小林先生には、本号への投稿を依頼しておりましたが、それが叶いませんでしたので、早稲田大学語学研究所『ILT NEWS』（1985年3月号）に掲載された先生の文章を、ご遺族の許可を得て、転載することといたしました。

小林先生は、1970年代に、青年海外協力隊としてインドでの社会福祉活動、マレーシア・シンガポールでの日本語教育と、海外でご活躍なさいました。帰国後の1982年から、早稲田大学の日本語教育に携わって来られ、2012年3月に退任される予定でした。日本語教育研究センターでは中級・上級レベルの日本語クラスを担当され、最近には「越境文学」「外国人作家の日本文学」をテーマにした授業を独自にデザインされ、リービ英雄、A.ピナード、楊逸、シリル・ネザマフィ、多和田葉子、李良枝らの作品を留学生とともに読みながら、越境によって生み出される文化や言語の豊かさ、アイデンティティの問題を考えるユニークな授業を展開しておられました。また、日本外国人特派員協会所属のフリージャーナリストとして、異文化交流に関する数多くの執筆活動や講演を行っておられました。

ここに先生の文章を記し、ご冥福をお祈りいたします。

(文責：本号編集担当)